

らでは、艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。」

と見えてゐるが、士道の本義が現代的なる道念となる時、かくの如き眞實に「仕末に困る」ものであり乍ら、其の困る人として、眞に必要な人物となることを願はねばならないであらう。師道の確立維持の大業の上にも、かゝる意味に於て困る人間が重要なのでなければならぬ。

三、殺人劍と活人劍

山岡鐵舟は一夜門下の壯士一名をひきつれ獨園和尚の宿坊を尋ねて曰く、「禪師昨日の提唱に忠孝仁義はあとからつけた名前に過ぎぬとの仰せを、聞ずてならぬと此の男が憤り、説けど訓せど承知いたしませぬ。由つて直々の垂示が煩はし度く夜陰に及んで推參仕りました。」之を聞いて和尚は持つてゐた煙管で灰吹を叩き、「此の音が聞えますか。」壯士、「耳があつたら聞えい何とする。」和尚、「何となります。」壯士、「始めはカツ／＼後はチリ／＼。」和尚すかさず、「灰吹はカツ／＼ともチリ／＼とも言はぬと申しますぢや、それはあんたが後からつけた假聲ぢやぞあせんか。」壯士此處に於て省あり。鐵舟すかさず懷中より一札を出し、「貴様が負けたら約束

通り腹を切れ。」と出でたので壯士が青くなつて終つた。⁶²之に依つて、教師と生徒、此處には師と弟子との關係を見るに、直接此處に現はれてゐるのは、禪師と壯士との面接でなければならぬが、併し、此の面接に依つて果して如何なるものが成就せられてゐるのであらうか。此の因縁が如何に深い教育の如實相を現はしてゐるのであらうか。吾々はかくの如きものを、士道即禪道即師道の、殺人劍即活人劍であると言はなければならぬ。士道も師道もかゝるものに徹しなければならぬのである。

先づ、當面の禪師と壯士との面接に於て面授が成就する前に、之に先行した二つの光景が想起せられ得る。其の第一に和尚と鐵舟との間の面授であり、其の第二に鐵舟と壯士との間の面接である。而して前者に於ては何等の問題が起らなかつたのであるが、後者に於ては鐵舟の其の時の力量を以つてしては如何とも解決の出来ない難問に陥つて終つた。此處に既に鐵舟が和尚より面授せられたるものを以つて、同じく之を壯士に面授し得ざる力量の差が見られる。其處に、和尚が煙管を以つて灰吹を叩いた時に、既にしつかりと物に突き當つた瞬間が見られ得る。「此の音が聞えますか。」と言ふのは、既に第二の月から第一の月へ眼を轉せしめる指月の指で

なければならぬ。にもかゝはらず、壯士は未だ之に響き還へる感を有たず、單に感覺的なる身の音に執はれてゐるので、更に「何となります。」と和尚が渡りを付けたのである。壯士は巧に半ば正直に半ば虚偽を以つて答へた。かくて假聲と言ふ障害物を全然取り去つて終ふと、忠孝仁義は總べて人かゝる音、自身に生きるものとして始めて直々に明かにせられるのである。忠孝仁義は總べて人格の奥底に眞に生きるものとして如實に面授せられるものでなければならぬ。忠は法則であり孝は生命であると區別せらるべきものではない。中江藤樹の如く、其處から天地萬物が出で又六合が照明せられねばならぬ。忠孝仁義は正しく絶対無に於て生きるものである。教育の如實相は、總べてかくの如き絶対無の場所に於て生きるものであり、かくの如き面授、面受に依つてのみ得られるところの生命的交渉である。

此の點を一層明かにするが爲に、右の事實を今一度師弟道の本質的意義から考へて見よう。先づ和尚と壯士との面授に於て、身授があり心授があつたことは見られ易い道理である。然も此の間に在つて和尚と鐵舟との間に新たなる身授心授があつたのではなからうか。又更に和尚自身も一層深く自己の身授心授を成就してゐるのではなからうか。鐵舟が壯士に傳講した場合

に其の壯士の憤りがなかつたならば、鐵舟はそも何を壯士に傳へ得たであらうか。此處に一壯士の出でたことは、其の壯士の異とするに足る點であると共に、未だ正しく師が弟子を見又弟子が師を目のあたりに見てゐないものが存してゐる所以である。かくて和尚が鐵舟に提唱した場合に逆つて見ると、誰人かかの壯士の如きものが出でなかつたのであらうか。若しかゝる壯士の如きものが出てゐたならば、和尚は果して如何なるものを傳へ得たであらうか。此の場合鐵舟に於て、恰も孔子が、「吾與_レ回言、終日不_レ違如_レ愚。退而省_レ其私_レ亦足_レ以_レ發_レ回也。不_レ愚。」と言つて顔回を愛した如く、和尚の道を發明するところのものがあつたであらうか。かく見來ると夜陰に及んで和尚と鐵舟とが相會したことに於て、其の間に新たなる面授、面受があつた筈である。又和尚自身に於ても一層深き面授があつた道理である。夫故に、此處に面受を得たものは獨り壯士のみではない。かくて鐵舟が壯士に突き付けた一札に依つて、壯士が青くなつて終つたと言ふことは既に餘興であり、壯士の青くなつたのは鐵舟の劍に依ると言ふよりは、寧ろ和尚の煙管に依ると見なければならぬであらう。誠に士道はかゝる意義に於て、殺人劍から活人劍を求めて且つ自在でなければならぬのである。

四、師道の自覺

士道はさながら死道に於てあらねばならぬ。士道は絶対に死することに於て生きる道である。蘇生を豫期して死するのではない。絶対に物になり切つて再生するのである。而して此のことに於て同時に死道はさながら生道でなければならぬ。死道と生道とは此處に最も深い意義に於て直ちに一如してゐる。死と生と區別するのではない。死と生とは本來分つべからざるもので絶対無に於てあるのでなければならぬ。然るに、此の絶対に死して生きるものは、又絶対に他なるものゝ死して生きる道を直ちに認めることが出来る。絶対に物に突き當つて還へる感其のものが夫に於て顯現する。師道は此の死して生きるものゝ深き場所に於て私と汝との分離的結合として見出され得る道でなければならぬ。かくの如くにして絶対に死することに於て生きる瞬間々々に、絶対に生きつゝ死して行くものに於て、其の瞬間々々眞の師道が成り立つのである。而してかゝる師道の本質は、直ちに師弟道であり又教育道でなければならぬ。

此の士道は一面に於て、私と汝との關係として君道に關し更に臣道に關する。而して君臣道

は即ち公道であり又忠道であつて、之が天道の發現でなければならぬ所以である。之に對して師道は他面に於て、私と汝との關係として弟道又は子弟道に關する。而して之は親子道に通じてゐるものであつて、即ち親子道としての孝道であつて、之が又天道の發現でもなければならぬのである。かくて士道は、死生最も切なる死地に於てあり、師道は死生最も切なる生地に於てなければならぬ。かくの如くにして公道に生きる士道の自覺と、孝道に生きる師道の自覺とが、根源的に合一すべき所以を明かに示すことが出来るのであり、之が忠孝一揆の大支柱に立脚せるところの、我が國独自の教育精神の現代的に深化せられたる自覺の姿であり體系であると言ふことが出来るであらう。師道の自覺とは言ふところ極めて簡單であるけれども、其の實現は極めて困難なるものである所以も亦、自から明かにせられねばならない。師道の嚴と言ふことは、尙更やさしげな修養の程度で、徹底的に確立維持され得るものではないのである。誠に、山岡鐵舟が其の劍の極意として示してゐるところのもの、即ち、

「活刀をながす——一刀起り、一刀すたること也。」

「うつてうたざるとの心となる、これ力すたるの至極なり。」

と言ひ切つてゐるところのものに悟入しなければならないのが、師道の嚴の極致と言ふべきであらう。師は凡そかゝる意味に於て、教へんとしても、尙子弟を導き得るものではない。教へんとする力が、「うつてうたざる」との心となる」如きものに至つて、始めて、如法に師の道の嚴であるもの、眞の姿が現はれねばならないであらう。師道と士道、士道と師道とは、かゝる場所に於て直ちに圓通しなければならぬ。而して此の圓通を圓通と知らざる底のものこそ、眞實の師道の嚴でなければならぬのである。

第十六章 結 論

死の問題への回答は、吾々に單なる理論的なる解決を迫るのみではなく、生の根源に關する問題として、生自體を要求する性質を必然的に有つてゐる。單なる理論以上に、理論と共に存立すべき實踐を猛烈に要求する回答でなければ、死の問題を提出する意味さへ支持されない。死の問題は人間に於て始めて提出されるが、人間に於ては遂に回答すべくもない。然もかゝる根本的なる矛盾を含むが故に、正に人間の最終の課題とならざるを得ないのである。死に就いて

は、吾々は夫と交渉することが出来ぬ。死は生に取つて全く秘密的である。全人類に隱匿されてゐる。夫にも拘らず、吾々が平常他人の死亡に於て強烈なる交渉に置かれざるを得ない。死は顯在的なる生よりも猛烈なる迫力を有つた事實である。全人類の前に平等に存する、殆んど確然たる事實として、吾々に嚴然として迫つてゐる。吾々が直接に眞實なる意味に於て經驗することの出来ないものであり乍ら、かくの如く生命全體を蔽ふ力を有ち又生命を潰滅せしめる性格を有つてゐる事實は、死を置いて外には存しないのである。

之に對して教育に就いて、吾々は生命に最も近接したる事實を見出すのである。教育に於て吾々は種々の經驗を體得してゐる。教育に關する種々の問題の回答は純粹に理論的立場から之を果し得るのである。更に理論的なる回答のみではなく、生に於ける實踐を通して、教育に關する種々の回答が與へられてゐる。のみならず、事實かゝる實踐に依つて、平常個々の問題の回答を與へざるを得ないのである。生に於てある教育的事實は、夫々の場合に、夫々の問題に決定的な回答を與へつゝあるのである。たとひ理論の上で又反省の中に未解決の問題として遺されてゐるとしても、既にかゝる事實に依つて其の都度夫々の回答を與へ終つてゐるのである。

此處に教育に關して種々の問題が論議せられ、何人でも一應教育に就いて語り得る理由が存してゐる。然も、其の正に根本的なる回答を要求する問題が、提出されねばならない根據も其處に見出されるのである。

我が國の精神的なる傳統としての武士道は、現實の生に於て常に絶對の死を正視し、自己の直下の問題として絶對の生即絶對の死として、死を通じて生を省察することを理念とするものである。武士の生活は朝夕唯死々々と死を心得て死を見つめ、却つて之に依つて生其のものを自ら充實せしめたものである。眞に死節を全うすることは、常に死處を求めて生の執着を忘れたる態度に於て漸く果され得るのである。行住坐臥の自己に於て主君を忘れることなく死々々と許り念じて一瞬も怠ることがなければ、一生の中過誤もなく勤められ得るものであると言はなければならぬ。尤も、武士道學派殊に山鹿素行の武道論を正統とする者は、葉隠武士の「武士道は早く死ぬかたに片付くばかりなり云々」と言ふ主張を粗野な野武士的なるものであると批評する者もないではなからうが、其の表現の穩當又は激越の區別は認めなければならぬとしても、其の根源的なる意味に於ては、兩者は相通するものがあることを感得せざるを得なく。

死に於てかくの如く眞に生きる道に就いては、其の外尙多くの武士道の體得者の教訓がよく之を示してゐる。此處に我が國の武士道の人間的であると同時に宗教的であるものが、一體となつて結び付けられてゐるのである。武士がよく禪宗に依つて修養したことは、單に禪宗の諸説が簡明にして他の宗教よりも一層武士の生活に結び付き易かつたと言ふことに基づくよりも、却つて更に根源的なるものに於て人間的であると同時に宗教的であつたからであり、之が武士と禪とを最もよく結び付けたのであると言はなければならぬ。又逆に禪に於ても其の或者は劍に依つて禪の極意を示してゐるのである。武士の切腹の眞精神に於て威嚴を感受せざるを得ないのは之を人間的なる面に於て受け取つてゐるのである。切腹の威嚴性には、既に神の力さへ藏してゐると言はなければならぬ。即ち自己消滅即自己形成である。絶對の死即絶對の生であり、絶對の生即絶對の死である。而してかくる絶對の生に於て絶對の教の力が含まれてゐるのである。師道の嚴はかくの如き根源力に基づいて確立維持されるのでなければならぬのである。武士道に於てはよくかくる根源に於て死を見つめつゝ生を把持してゐるのである。武士道の絶對的なるものに在つて、同時に覺者としての宗教力を有ち、更に導師として其の教育

力を有つてゐるのは、此の死と生との根源に於ける通路に立つてゐるからである。武士道の總べてが、固より、教育ではないが、教育の最深なるものゝ姿、師道の嚴なるものは、かゝる精神力に通じてゐるのである。

吾々は、人間の社會に於て生れ社會に於て生き而して社會に於て死して行くのであり、又かかる現實其のものに於て人間的であり同時に宗教的であるところに、行爲的直觀の意義と其の反省とを爲し得るのである。教育は、自己形成であると同時に種の連続であり又自己消滅であると同時に種の自覺であるところの、個性の眞實の創造と共に成り立つ。師道の嚴存はかゝる個性の創造的なる根源層に基づくのでなければならぬのである。

註記

- 1 四一二頁参照。2 四二〇頁参照。3 四二二頁参照。4 卷之二、爲學下参照。5 日本經濟大典六卷、二九頁参照。6 同上書、三〇頁参照。7 中江藤樹文集全、四三六頁参照。8 拙著、行の教育一〇九頁参照。9 日本倫理彙編、四に據る。10 有朋堂文庫本、四頁参照。11 續々群書類從、第十教育部、二一四頁参照。12 同上書、四一頁、四二頁参照。13 同上書、一九九頁参照。14 角田簡撰

- 開齋傳、高橋俊乘氏、日本教育史、二二三頁参照。15 嚶鳴跛遺草、卷第六、尙、乙竹岩造博士、日本庶民教育史、第二編、第三章、第四節参照。16 乙竹博士、日本庶民教育史、上卷、四二六頁参照。17 有朋堂文庫本、三三頁参照。18 二八頁参照。19 一四五頁参照。20 一四二頁参照。21 三三二頁参照。22 二二五頁参照。23 二二〇頁参照。24 一一四頁参照。25 一四八頁参照。26 一四九頁参照。27 一七七頁以下参照。28 哲學研究、大正十三年、参照。尙、日本教育史、一〇二頁、一〇四頁参照。其の外、橋本實氏、武士道と日本精神、歴史公論、昭和九年一月號、参照。29 國民道德概論、一四八乃至一九九頁参照。30 五二二頁参照。31 高橋氏論文、前掲書、九四一頁参照。32 同上書、一二九乃至一二三一頁参照。33 高橋氏、日本教育史、一二〇頁参照。34 高橋氏、前掲論文、一〇五一頁参照。35 高橋氏、日本教育史、一二三頁参照。尙、伊藤眞三氏、日本倫理學史、二八三頁参照。36 日本國粹全書、第十輯、五頁参照。37 之等の點に就いては、加藤咄堂氏、英雄と修養、を参照。38 新校、羣書類從、第十七卷、武家部(一)、四四〇頁参照。39 藤樹先生全集、三卷、二〇九頁以下参照。40 有朋堂文庫本、四八三―四八四頁参照。41 加藤仁平氏、山鹿素行に於ける士道論的思想の發達、大正十三年、哲學研究、一〇一五頁参照。尙、同氏、山鹿素行に於ける古學思想の發達、大正十二年、哲學研究、参照。42 葉隠全書、五一頁参照。43 同上書、五六頁参照。44 同上書、三九頁参照。

- 45 同上書、五五頁参照。46 同上書、五五頁参照。47 同上書、七六頁参照。48 大久保道舟編、道元禪師全集、二〇四頁参照。49 葉隠全書、九一頁参照。50 山田孝道師校補點註、禪門法語集、四四九頁参照。51 同上書、四四五頁参照。52 森大狂居士校補點註、續禪門法語集、一七六頁参照。53 佛教信仰實話全集、十八、禪宗篇、續、六頁参照。54 續禪門法語集に據る。55 安部正人篇、鐵舟言行錄、六七頁。56 同上書、一三九頁参照。57 同上書、五〇頁参照。58 同上書、一〇二頁、一二三頁参照。59 同上書、七七頁参照。60 同上書、一二五頁、一二六頁、二四五頁参照。61 同上書、二四七頁、一四〇頁参照。62 佛教信仰實話全集、十八卷、四六一乃至四六四頁参照。63 論語、爲政第二参照。64 鐵舟言行錄、二四九頁、二五〇頁参照。

續編 環境・生命・教育

昭和十三年五月××日に私は應召して征途に就いたが、機關銃小隊長として、中支の各地に轉戦し、數次の、戰場體驗を有つことが出来た。不幸××の戦闘に於て敵彈の爲負傷して、内地還送の身となつたのであるが、翌春二月になつて漸く傷口も稍小さくなつたので、京都陸軍病院高野川臨時分院將校病室の病床の上で、専ら此の十箇月に得られたところの體驗を中心に、左記の如き要領に依り、反省録を物して見た。即ち、戰場に於ける生死の問題を中心としての教育論に及んだのであるが、之しきのことしか擱めなかつたのかと、我乍らもどかしいと思ふのである。併し、歴戦者の感想の輪廓を示したものであるとして、又武士道と師道とを直下の問題とし、之を多少とも教育哲學的に考察したるものとして、此處に併せ一讀を得ば幸である¹。

第一 事實としての戦争

今次の支那事變に於て、人々は多くの戦争記録乃至戦争文學、其の外種々の角度から見られ

た支那に關する報告や論文に接し得るであらう。吾々は之等の種々の報告や論文に於て、戦争及び戦場の體驗を再表現し再經驗し得るところの、國民の種々相を想像するに難くない。而して夫等の人々がかくの如き再表現乃至再經驗をば、凡そ如何なる様相に於て行ふとしても、夫等が尙思想の範圍に止まつてゐる限り、全く自由であると共に、之等の體驗を未だ眞實に獲得したものではないことも亦忘れるべきではない。併し、世間には、一般に、思想を、恰も流行を追ふて種々に組合された服装が世の尖端を走つてゐると考へてゐると同様に——思想をも單に寄せ合せ又は組み直したものを、恰も獨自な指導概念を見出し得たかの如く取り扱つてゐる人々が少くない。吾々は、之等の輕薄なる思想に對して、常に嚴正なる批判を下して行かねばならぬ。殊に、傳統の歴史的意味と新しき思想の創造との、必然的なる聯關に就いて、最も深い注意を喚起せしめる必要がある。眞に新しい思想の承認には、古い思想の型を熟知し、其の型から必然的に要求されねばならないものとして、新たなる型に迄創り出されたとするところの内容を有たねばならない。之と反對に世間には、凡そ新しい術語に依り、内容の新たなるものが、理會せらるべき思想に就いても、一部の人々に依つて、既に夫以前に用意せられて來た普通の

思想の中に之を包含せしめ、思想の時代性を認識することなく、既存の思想の變容せられたる部分を、強いて認めず、或は全く氣付かずにさへゐると言ふことも屢々ある。併し、時代は移動を續けて止まない。繰返すことがあると認められる歴史と雖も一面に於て必ず何等かの移動を包含してゐる。一の段階から他の生活形態を其の儘に凝視することは出来ぬ。一の段階の眞相は、其の段階に生きることに依り始めて凝視せられ得る。此處に時代の移動性が存してゐるのであり、かゝる事實こそが、時代自身に於ける自己批判の存續する所以である。時代自身の自己批判の中に於て、歴史の過程が捉へられねばならないのであり、吾々は、徒らに此の過程を逃れて停滯してゐてはならぬ。他方無闇に尖端を走つて、かゝる歴史の過程の眞相に遠ざかる危険を敢て爲すべきではない。文化の自己批判、思想の時代性、歴史の過程の發展に、徐ろに流れつゝ、然も當然に、其の批判を、絶えず、内在化するの努力が拂はれなければならぬ。

戦争は種々の矛盾した部面を其の儘に包含してゐる。戦争は最も慘憺たる事實である。けれども同時に、此の慘憺たる事實の中には優雅なる一面を包含してゐる。戦争は最も激越とな

り得べき特殊なる生活現象である。併し同時に、最も沈靜なる生活部面を其の儘に内含してゐる生活現象である。悲劇の中に喜劇がある。危機の中に平和を藏してゐる。内と外との闘争が如實に現はれると共に、内と外との統一の完全に體驗せられる場面が到る處に生きてゐる。個と全との交渉の上に立ち、個と全との合一の現はれる場所である。私と公との離脱と包攝とが戦争に於ては同時に存在し得るのである。悲と喜とが生活の現實的側面より眺められた、戦争と和平との矛盾的要素の共存する姿であると考へ得るならば、私と公とは國民的自覺の側面より眺められたる戦争に於ける慘憺と優雅との矛盾的要素の同時存在の捕捉であり、個と全とは個人的生死の側面より眺められたる、同じく戦争に於ける矛盾的要素の同時存在の捕捉でなければならぬ。然も、個と全とが、個人的生死の問題を中心として内と外との對立と結合との難問を提出してゐる如く、私と公とが、國民的自覺の問題を中核とし又國家を基本として、其の内と外との、對立と結合との難問を指示してゐる。戦争は、實に、かゝる矛盾的自己批判の生活現象に於ける、最も顯著に激越となり得べき社會形態である。此の故に、吾々は、かゝる戦争に参加すべき使命を帯びて應召する出發點に於て、既に異常な感激と高度の興奮との下に、

個人的生死や國民的自覺や、生活現實の眞實相其のものに觸れざるを得ないのであり、如實に人間の心の裏を眺め得る機會が、當事者にはひし／＼と感ぜられるのである。私は、此處に、幾何かの文字を以つて、かゝる戦争の矛盾的體驗の記録を綴るに當つて、主として、戦場に於ける生死の問題の新體驗を取り扱ひつゝ、教育哲學に於ける基本的問題の一二を反省して見ようと思ふのであるが、戦争自體の危機的矛盾的要素の基礎體驗其のものを、常に直視すべきことを繰返し認識して置かねばならないのである。

第二 生活即戦争準備即教育

軍隊生活は、如何なる場合に於ても、生活即戦争準備であり、軍隊教育は戦争を主眼として構成せられる。其の中には、戦闘事實に直面すべき部分と、戦闘の結果に關聯せしめられるべき部分とがあり、戦闘事實に直面すべき戦争準備の教育に於ても、直接戦闘に参加する部分の準備教育と、間接に戦闘を助成する部分の準備教育とがある。而して其の程度の差を考へれば種々の細區分を爲し得ることは言ふ迄もない。併し、戦争準備の教育が、軍隊生活の特質を現

はしてゐる。而して平常時に於て、かゝる戦争準備教育が行はるべきことは言ふ迄もないが、非常時即ち戦争時に於てかゝる戦争準備教育が、益々眞剣に行はるべきものであり、戦争部隊の組織、軍隊の形式、軍隊の教育方式其のものが、一層高度に戦争準備化せられねばならないことは當然である。

動員間に於ける部隊の編成、部隊の活動、殊に編成間に於ける教育、出征の爲の出發、軍隊の輸送、敵地に於ける上陸作業等の過程的行動は、其の何れの部面も常に総合的全體として、生活即戦争準備即教育であることが、最も顯著に指示せられてゐる。而して愈々對敵行動に入つて、警備の任務に就き、掃蕩戰に参加し、更に戰闘に於ける生死の一线を越えつゝ活動する場合は勿論、不幸戰傷者として後方に收容され静養する病院生活の場合に於ても、総合的全體として、固より同様に考へられる。之等の組織的全體が總べて、其の部分々々に於て、戦争即教育の方式の下にある。

戦争態勢に於ける総合的全體を、組織的に觀察するとき、以上述べた如く戦争準備教育であるが、夫は、一つの體驗が、次に續く他の體驗に對して、直ちに戦争準備であり、同時に戦争其

のものであり、其の過程が教育的現象であることを意味してゐる。戦争を主眼とする軍隊生活は、かゝる意味に於て、單に學校教育と看做することは出来ぬ。併し言ふ迄もなく、自由なる自己教育を主眼とする社會教育とも區別せられねばならぬ。單に平和なる社會に於ける特別の教育的範圍に止まらぬ點に於て、軍隊教育は種々なる意味の學校と異なる。軍隊の内にも、常備軍隊内の教育の外に、研究機關としての軍隊の諸學校があり得る所以である。而して軍隊生活が、一日の或時間を、一定の教科を中心として、企圖的具案的に教育するのみならず、衣・食・住の三者を一體として、終日終夜、生活の全體を通して、教育の實施せられる點に於て、家庭教育の夫に類似したものを有つてゐる。併し、家庭教育は、肉親關係に繋る血族社會の自由な環境に成り立つのであるが、軍隊教育は、特殊な義務的社會の教育である點に於て之と異なつてゐる。且つ此の社會の構成員が種々の家庭から集められてゐる男性のみに依つて成り立つてゐる點に於て、特異性を有つたものであつて、各家庭から集合せしめられてゐる青年の教育機關である點は、寧ろ家庭教育より進んだ塾の教育生活に似たものを有つてゐると言ひ得るであらう。併し塾の教育生活は、元來自由な志望者の集團であるか、少くとも塾主の承認を得た

るもの、集團であるのに對して、軍隊の夫は何處迄も、國家的公的なるものである點が異なつてゐる。之等の點は總べて平常時の軍隊教育即戦争の様相であるが、戦争時に於ける軍隊の総合的全體的なる生活に於て、更に、其の構成員の各自が、上官と下官との區別なく、將校と兵との區別もなく、直接間接、生死の共通舞臺に活動せねばならない點に、其の生活即戦争準備即教育であることを一層高度的なものたらしめてゐるのである。

かゝる事實を一層明瞭ならしめる爲に、軍隊教育の方法に關して附言して見よう。軍隊の教育方法の特長と看做すべきものは、教授も養護も總べて訓練が其の中心になつてゐることである。學課と稱するものは、訓練を中心とした教育を達成せしめる一つの手段であるとさへ考へられ得るのである。學課も訓練の土臺の上に成り立つのであり、養護も訓練を主眼として考へられる。然も學課や養護は、單に訓練と併せられると言ふのでなく、訓練の實施の中に學課と養護とが統一せられて総合的に實施せらるべき場所にこそ、軍隊教育の妙味ある方法的原則が確立してゐるのである。かくて平常時に於ける訓練即教育即實戦への準備であるものが、實戦に於ては個々の實戦が即訓練であり、即教育であり、又次ぎに来るべき實戦への準備でなければな

らない。而して吾々が常に要望して止まないところの、教授・訓練・養護等の教育の各作用の統一が、訓練を中心として實施せられる。然も生死の活舞臺に於て夫が眞實相を形成して行かねばならない點に於て、軍隊教育の妙諦が實現せられて行くのでなければならぬ。此處に教授・訓練・養護の総合的活動の意義が十分に示唆せられるのである。而して此の教育的特質は、吾々の戦場體驗と人間的態度とに、大なる影響を有つてゐることは言ふ迄もない。

第三 戦場體驗と人間的態度

一、犠牲的態度と信仰的精神

戦場に於て吾々は著しく實踐的とならざるを得ない。實踐的となることには、何等かの中心的理念に結び付けられることが要望せられる。戦場體驗と犠牲的態度とは必然的な結合を有つ。犠牲的精神に生きることに依つて戦場體驗を深化し其の意義を十分に獲得することが出来る。人間は、自己の身體に直接的な愛着を有つ。犠牲とは、かゝる直接的なる愛着からの離脱でなければならぬ。戦場に於ける生命の危険は、かゝる身體的愛着からの離脱に最も大きな迫力

を現はす。此處に人間の犠牲的態度が、何等かの中心的理念に結び付かざるを得ざらしめ、普通に信仰的精神と呼ばれるものを發揮せしめる。人間の生命を離脱する人間の態度は必然的に宗教心を惹起せしめ、信仰心を養はしめるに至らざるを得ない。事實將兵が、太陽を拜み、日日の生命を感謝し、神や佛に祈願し、經文の書寫をさへ爲すこと等が、戰場生活の一面に於て度々目撃せられ得るのである。かゝる戰場體驗に於ける犠牲的な人間の態度と信仰心に依る新しき生命の意義の發見の機縁とこそ、最も英雄的なる武人の一面に就いて、深い反省を與へしめざるを得ないものである。

吾々は、平素平和の間に於て、萬事を全生命的に遂行すべきことが唱へられてゐることをば、屢々聞いてゐる。平和な時に於ても、教育者の態度は常に全生命的活動でなければならぬ。何等かの中心的理念と結び付けられた、眞實の犠牲的態度を以つて遂行せらるべき信仰的精神の確立こそ、教育者の生活に最も深い迫力を與へるものでなければならぬ。併し乍ら、かゝる信仰的精神に生きると言ふことは、戰場體驗に於ける犠牲的な人間の態度への推移と、必ずしも同じ意味のものであると見ることは出来ぬ。教育者はよく、吾々は何も必ずしも直接

戰場に赴かないけれども、教育者の生活も亦生命がけである。戦の場に立つも立たぬも、眞剣なる生活を主とする意味に於て何等變つたことはないと言ふ。之は正に其の通りであつて、戰場に赴かない者も其の覺悟を有つべきことは言ふ迄もない。而して戰場體驗に於ける犠牲的精神が、平和な時に於ても、更に戦時に於ける平和な場所にあつての教育に於ても、常に模範とせられねばならないことは言ふ迄もない。併し、かゝる平和な場所に於ける獻身的態度と、戰場體驗に於ける犠牲的態度とが直ちに同じものであるかの如く、其の内容が混同せられてはならない。少なくとも、平和なる教育の實現の場所に於ては、生命の突如として喪失せられる危険にさらされてゐない。此の故に、温室に於ける裸體の如きものである。眞に寒風の吹きすさぶ中に於ける相撲の如きものではない。夫故に、教育者自身が、吾々も亦生命がけの仕事をやつてゐると言ふのは、其の意氣込みに於ては固より正當であるべきであるが、事實に於て其の實現は戰場體驗に及ばないものが残つてゐるのである。教育者以外の側から、教育者も亦生命がけの仕事をしてゐるのであると認定することは、固より自由でもあらう。唯戰場に於て、始めてなま／＼しい血戦が生命がけの仕事を、要求してゐることを忘れてはならないのである。

二、其の日其の日の生命の體驗

戰場に於ては、キリストの所謂、「明日のことを思ひ煩ふな、明日は明日みづから思ひ煩はん。一日の苦勞は一日にて足れり。」と言ふ、即ち「其の日のことは其の日にて足る」と言ふ眞劍なる生活精神が如實に感得せられる。教育に就いても亦かゝる意味に於ける、其の日其の日の生活が實現せられなければならない。併し、之と同時に其の日其の日の具案性が、一層廣い企圖的全體に連結せねばならないのであり、其の連結を離れて其の日其の日が生かされることは出来ぬ。平和な教育に於ては、寧ろ此の連結に其の重點が移動しつゝ其の日其の日が移行せしめられることに、重要な意味が置かれる。教育が生命の舞臺に存続せしめられるからである。之に對して戰場體驗に於ては、正に、其の日其の日の移行に、重點が置かれる。固より、戰場の生命體驗に於て、幾何かの中のあることは之を無視出来ぬ。然も尙、其の日其の日、其の時々刻々に重點を置かざるを得ない。直前に右側にあつた某が戦死する。直後に自己自身の生命は喪失することが示唆されてゐる。死の面に向つた生命の舞臺にあるからである。尤も、教育者自身

が、戰場體驗と同じ意味に於て、平和な場所にあつて生命がけの仕事をしてゐると言ふことが、其の眞實性を逸脱し易いと同じ程度に於て、戰場體驗者が、——平和な中に於ける生命の體驗に比して、何ものか意味あるものを捕へ得てゐると言ふことは事實であるとしても、——必ずしも總べての歴戦者が、同じ程度に於て、かくの如き何ものか力を有つたものを、獲得してゐるとは言ひ切れない。其の體驗は自ら深淺長短等種々の差異を有つ。又總べての者が自覺的であるとは限らない。單に戰場體驗を有ち得たと言ふのみで、戰場體驗の深刻なる意味を、あらゆる者が捕へ得たとは言ひ切れないのである。

キリストの、其の日其の日の生命の體驗は、必ずしも戰場體驗に於て得られたものではない。併し、彼の生命の試鍊が、既に、平和なるべき世相の中に於て深刻なる戦であつた。此の故に、戰場體驗の犠牲的精神の發揮に於て、何ものか眞實なるものを捕へ得るが如き人間は、既に平和なる世相の中に於ても、最も尊重すべき生命的犠牲を體認し、如實なるものを獲得し得る程の人物であると言はなければならない。かくて、逆に、かく平和なる世相に於てかゝる眞實性を捕へ得べき、——少なくともかゝる資質を有つてゐる——人物が、未だ其の機會に接し得な

かつたものが、新しく戰場體驗に於て、與へられた客觀的事情を機縁として、其の眞實性の體驗を確實にし、或は熟知せしめるに至ると言ふことは、信すべきことであると言はねばならぬであらう。私の如き平凡人が、——戦前の體驗に於ても、其の資質に於ても魯鈍なるものが、——唯單に戰場體驗の幾何かを有ち得たと言ふ事實のみでは、「眞に邦家の干城、皇軍の誇と唯々感謝感激の至情に堪へず」とか、「尊いこの御體驗はいつまでもいつまでも君の人格の上に、延いては君の各方面への御活動の上に光り渡り、しみ渡るでせう」とか言ふ賞詞は、遠く及ばないものであることを自認せざるを得ない。唯私は、「何卒凡てに氣をおつけなされ從來鍛へられし精神と技倆の御發揚を祈上候」と言ふ恩師の垂示を只管遂行することに努めて來たに過ぎぬ。人々は、戦争状態に於ける綜合的全體の偉大性と各個人の體驗の深淺廣狹とを、直ちに混同すると言ふ誤謬に陥つてはならない。かゝる眞實性の捕捉は、戦地に於ける、各人の職責・地位の高低・上下や、年齢の差異等にはかゝらぬ。人の個々の行動の價値は、一に其の全人格的態度の如何にかゝつたものである。

第四 戰場心理

一、戰場心理の一般

戰場心理の一般的傾向として最も顯著に吾々の注意を惹いたものは、戰場指揮である。戰鬥に於ける組織的行動の體驗は、軍隊が組織的團體である限り當然であるが、此の軍隊の組織的行動は指揮官の態度に其の中核がある。指揮官の態度如何は、其の軍隊の組織的戰鬥行動の成果の大半を左右すると言はねばならない。戰鬥間部下は指揮官の命令を中心として行動せざるを得ぬ。部下はよく指揮官の顔を見るのである。かゝる心理状態にある戰鬥間に於て指揮官が少しでも躊躇してゐる色が見えれば、其の氣分は其の部下全體に擴がつて終ふ。部下が如何に其の指揮官を欲するかと言ふことは、萬一指揮官が戰鬥力を喪失し、戦死或は戦傷をしたる様な場合には、部下は直ちに先任者の順を以つて、其の指揮官を選定されることを欲し、時としては部下自身が其の指揮官を選定して戰鬥行動を続けるのが常であることに依つて明かであらう。戰場經驗の始めの中は、極めて小心であるのが普通であるが、戰鬥の經驗を重ねるにつれて、

漸次大膽になる。誰でも次第に勇敢に行動する態度になるのは自然である。併し、かゝる戦場心理に支配された時期は最も危険である。時として眞の勇氣の域を去つてゐる場合もある。之は最も危険であると言はねばならない。かゝる心理状態の時期には思はざる場合に損害を受けることが往々にしてある。知らず識らずの間に敵を軽んじてゐることがかゝる心理状態の時期に暴露する。夫故に、眞の勇氣は、單に勇敢であると言ふことを越えて、其の上に向戦闘の經驗の初期に於けるが如き小心を、其の中に含めてゐるものでなければならぬ。始めは小心に、次ぎには勇敢に、而して第三次に小心をも内に含んだ眞實の勇氣に進んで行くのが、戦闘場裡に於ける體験の深化であると言はなければならない。かゝる意味に於て、緒戦の成功不成功と言ふことが、爾後の戦場心理を支配する重要なものとなる。緒戦に於て失敗することは、著しく小心の度合を増さしめ、反對に緒戦に於て成功することは爾後の戦闘に際して、勇敢に行動せしめる爲に重大なる力を與へる。而して緒戦に於ける小心の姿態を忘れることなく、之を眞實の勇氣の發揮に至らしめるが如くに指導することこそ、指揮官が部下に對して有つべき戦場心理の體得の妙諦でなければならぬ。激烈なる戦闘に於て、友軍に相當の損害を受けたにも拘は

らず、尙猛然として突撃を爲し攻撃精神を維持遂行すると言ふことは、一に、かゝる戦場心理の一般的傾向をよく理會したる指揮官の下に於て可能となるのであり、かの、「天皇陛下萬歲」の叫びと共に悠然として死地に就くところの勇猛心を振り起さしめるに至ることも亦一に之に基づくのである。

戦場に於ける心身の關係は、不規則的なる生活と強烈なる刺激とに依り、心身の關係に不均衡を生ぜしめ、種々の錯誤に陥らしめることが多々ある。不規則的なる生活は、食糧と炊事との意の如くならざることによる營養の不十分と、日夜の區別なき苦闘の爲に睡眠の不足を來すことに基因してゐる。其の結果は、心身共に極度に疲労するのは當然である。強烈なる刺激は、戦場に於ける激越なる環境に生きる緊張感を主流として惹起されるが、戦争の中に於ける平和の期間は言ふ迄もなく、時として限りない緊張時の間に於てさへ起り得る、弛緩したる氣分が交錯してゐる。而してかゝる緊張感と弛緩したる氣分との相互的な交錯が、一層戦場に於ける強烈なる刺激を高度化する効果を有つてゐるのである。人は總べて環境的人間である。殊に戦場心理に於て生死の際に直面するだけ更に強く且つ深い環境的人間となるのである。此の強烈

なる刺激に逆ふて、心身關係の著しい不均衡に堪え難くなるとき、往々神経衰弱となる。此の如き状態の強烈なる者は、既に戦病患者であるが、一般に戦場に於ける人間の存在の在り方は、比較的健全であると見える場合に於ても、既に多少とも神経衰弱的な性質を帯びてゐることは逃れ得ない。

二、矛盾的存在

心身の關係が緊張感と弛緩した氣分との交錯として不均衡状態になつてゐると同時に、戦場に於ける人間は個別的に公的に矛盾的な要素の同時存在として生きる。先づ矛盾的個的存在の方面を考へて見ると、戦場に於ける生死觀が著しく其の力を發揮する。之は個人中心的に考へられるとき、生に對する愛着であり死に對する本能的なる恐怖でなければならぬが、之と同時に他方戦場に於ては信仰心の發露が又顯著に示される。信仰心は、先に述べた生死が個人中心的に考へられるに對して、一般者中心的に、考へざるを得ないところのものである。此處に個人的なるものと一般的なるものととの矛盾的統一がある。生死觀と信仰心との同時存在こそは、

かゝる矛盾的統一の必然的性質でなければならない。更に矛盾的個的存在として、戦場に於ては言ふ迄もなく敵愾心が支配する。之は戦場に於ける現實中心の見方であるが、此の敵愾心の奥にも宗教的信念の強く働いてゐることを見逃すことが出来ない。強い宗教的迫力に背景付けられて敵愾心は益々強くなる。然るに此の宗教心は超越者中心の見方から起つてゐる。現實の中に超越者の力を包み、超越者の力の中に現實は生かされるのである。一層一般的に言へば、戦争慾と博愛心とが、矛盾的なものであり乍ら同時存在するところに、戦場に於ける矛盾的個的存在の在り方が明示せられてゐるのである。

次ぎに矛盾的公的存在の側面より、右の如き戦争慾と博愛心との同時存在を反省して見れば、夫は國民的英雄心理に於て最も顯著なる形態が現はれる。慘酷なる個々の戦闘行爲の繰返されるのも勇猛なる戦場活動の續けられるのも、殆んど之に由るのであり、之が益々戦場體驗の激越性を高からしめるのであるが、他方に於てかゝる激越なる戦場體驗の只中にあつて、優雅心が底力強く働いてゐるのである。かくの如き戦場に於ける優雅心がなくては眞實の國民的英雄たり得ることは出来ぬ。戦場に於ける眞實力の發露は、かゝる慘酷性と優雅心との同時存在す

る國民的英雄心に於て最も顯著であり、之が國民的英雄心である限りに於て、單に個的矛盾的存在ではなく、夫は既に其の周邊の大なる公的矛盾的存在として働いてゐるのでなければならぬ。更に矛盾的公的存在として、民族的自覺心が支配力を有つ。此の民族的自覺心の中に、吾々は、國家的奉公の精神と同時に個人的家庭愛に眞實生き切ることが出来るのである。國家的奉公に生きる熱意があつてこそ戰場體驗の苦闘に堪えることが出来るのであるが、之は決して個人的家庭愛を全部拋棄したものではない。單に家庭愛を忘却したものは、未だ民族的自覺を獲得したものと言はれない。家庭愛に執着してゐては、固より、國家的奉公に生き抜くことは出来ぬ。家庭愛を思ふことなくして國家愛に生きることは事實であるが、此の國家愛の中には限りない家庭愛が内含せしめられてゐるのである。民族的自覺心の只中に、かゝる國家的奉公と個人的家庭愛とが、矛盾的公的存在の形態に於て統一してゐるのでなければならぬ。

三、國民性の顯現

戰場に於ける人間の存在の様相は、以上述べた如き矛盾的存在の二面性に於て最もよく捕へられ得るが、かゝる矛盾的存在の客觀化されたものとしての、國民性の顯現に、吾々の反省を及ぼすべきことは常に之を忘れてはならないことであらう。我が日本人の國民性は、戰場心理の上に現はれるとき、第一に、最も積極的精神となつて來る。攻撃精神の猛烈に現はれるのは之を明かにして餘りあるものである。支那人の民族心理が之に對して防禦中心であり、彼等が事大主義であつて、凡そ強いものに對しては弱くなる、と言ふことゝ正反對であると言へよう。第二に、日本の國民性は戰場に於て犠牲的精神となる。而して最大のものをも敢然として犠牲にし得る奉公の精神の中に、我が國體の尊嚴性と結合せしめられたる信念のあることは、特に重要な意味を有つてゐるものと言はねばならない。支那人の民族心理が、之に對して獨自性を有せず、常に依他的であることは、顯著なる對立を示してゐる。依他性を主とするが故に、自力がない。自力がないが故に、事大主義である。他に依つて生きるが故に、他の變化に依つて自己を變化せしめねばならぬ。此處に矛盾が起きる。矛盾が起きれば自力を維持することが不可能となる。自己が維持せられないことの危険は非常なる恐怖心を起さしめる。かくて其の自

衛手段として言・思・行の三者を自由に使ひ分けねばならぬ。言・思・行の不一致は彼等の生活の最上策とならねばならぬ。自己の犠牲は最も不可とするところである。第三に、日本人の國民性は戰場に於ける團結的精神となつて現はれる。組織的行動の行はれるのは、實に此の團結的精神の威力であると言はねばならない。支那人に於ては、無統一であり、吞氣であり、平凡である。此處に戦争の結果に、勝敗の分れ目に、大なる意味が発見出来るのである。以上は、日本人の國民性の顯現から主として其の特長と見らるべき方面に着目して述べたのであるが、日本人の短氣と熱情の持續力の稍乏しいことは、國民性の短所として、戰場にも顯はれてゐるところである。支那人は、此の點に於て、日本人と比較して明かに廣漠なる感情を保持し、其の擴大性と抱擁力とを有つてゐることは、之を見逃し得ない。而して之等の諸點に於て、日本人と支那人との民族的性情が反對し合つてゐると言ふことが、今次の支那事變に於ても正面から衝突せしめられてゐるのであつて、之は明かに矛盾的要素の衝突である。今後の日支の結合の成就せられるが爲には、之等の要素の矛盾的同時存在が眞實に成就せしめられるところがなければならぬであらう。

第五 生死の際

一、生死の越えがたい一線

戦争に於ける諸々の經驗は實に多角的なる矛盾の世界の總合的體驗である。而してかゝる矛盾的體驗の最も激越なる頂點を考へれば、言ふ迄もなく、公的矛盾的存在と個的矛盾的存在との總合統一せられたる意味に於て、生死の越えがたい一線に、直面する場所であればならぬ。生死の際こそ戰場體驗の中核である。吾々が、常に教育的關心に注意を拂ひ乍らも、尙かかる戰場體驗の叙述を試みることは、眞に見逃すべからざる問題であると言はねばならない。トルストイは、「戦争と平和」に於て、友軍と敵軍との間を隔てゝゐる空虚なる空間、双方の軍隊を區別してゐる嚴肅な、不氣味な、近寄ることも捉へることも出来ない線に就いて、眞實巧妙に次ぎの様に述べてゐる。

「この死者と生者とを分つ線、吾人をはつと思はせるやうな線を一步越えれば——測り知るべからざる苦痛と死とが横たはつてゐるのだ。そしてそこには何があるだらう？ 誰がゐる

のだらう？ あそこには——この荒野や樹木や太陽の光り耀く屋根のあちらには、一體何が
あるのだらう？ それは誰も知らない。同時に知りたくてたまらない。この一線を越えるこ
とは恐ろしい。が越えて見たい。そして結局吾々は、自分たちが遅かれ早かれこの線を越え
て、そこに——此の線の彼方に——何があるのかを知るやうになるのだ、といふ事實を知る
にいたる。死の彼岸に何があるかといふ事を早晚知らなければならぬのと同じだ。が、しか
もこの俺自身は、目下頗る強壯で、健康で、快活で、激越な氣持になるほど生き／＼とした
人々に圍繞されてゐるではないか。敵前にゐる凡ての人間はみな、かういつた感情を、思索
のふるひに通さないまでも、自覺してゐた。その上更にこの感情は、現在この瞬間に惹き起
された一切の事柄に、轟然たる光輝に喜ばしく鮮明な印象を與へるのだつた。」

此處に言ふ「死者と生者とを分つ線、吾人をはつと思はせるやうな線」此の一線こそ幾度か
體驗しても——其の度毎に、違つた環境と緊迫の程度との相違を認めざるを得ない、而して遂
に越えなければならぬ一線である。否寧ろ、測り知るべからざる重壓のある、又動かざる
を得ない後からの壓力と、同時に引き付けられる如き前からの誘惑との交錯した領域其のも

の、體驗である。生死の際に於ける自覺が此のとき程明瞭に意識せられることはない。敵彈が
數限りなく、吾々の身邊に土を掘り樹皮を裂いて行く。恐しい私語の如き音は勿論、破塵を
いやと言ふ程おつかふせる砲彈の破裂の爆音等は、全く戰鬥に於ける必然的事象であり乍ら、さ
ながら偶然的事情に基づいて起つてゐるが如くに感じられるのである。自己の身體の存在等は
かゝる生死の際に於ては、自然の必然に於て其處にある石片か樹木かと、全く同じ様な意味し
かないものゝ如くに感ぜられて終ふ。一步誤れば死である。一瞬前には生であつたものが既に
無言になつてゐる。其處では、人間の生命は、極めて平凡な植林の一本が枯れて倒れる如くに、
いとも安價なものゝ如く見られるのである。平常極めて重視されたものが、かくも平凡に取り扱
はれることは、戰場に於ける特殊な環境の支配するに由るのである。夫でゐて、かゝる戰鬥の
行動的環境に於ける程、人間の内的生命が自然と對立し、環境と緊張し、又鞏固なる組織を保
持し、獨立的なる人格的存在として活動をする場所はないのである。かゝる意味に於て、人間
の生命がかく迄尊重せられる瞬間は、容易に繰返され得るものではない。一面に生命が尊重せ
られ他面に生命が安價となる。生死の際に立つと言ふのは、眞實かゝる戰場の最後の線に直

面したる矛盾的存在の形態を言ふのである。

此の「生者と死者とを分つ一線」即ち生死の際にある領域程、トポロジカルに見れば強靱なる障害はない。母親の監視の下に學習してゐる子供が、戸外の友人の遊び聲に心を引き寄せられ乍らも、母親の威力ある目のある限り、飛び出すことが出来ないと言ふことは、囚人が牢屋の障壁を破つて飛び出すことの出来ないこと、其の事實上の障害物其のものには差異があるが、トポロジカルに見れば同じ意味を有つたものである。唯環境的障害として兩者を比較すれば、一は觀念的であるが、一は物體的であると言ふ差異があるのみである。戦鬪場裡に於ける生死の際の障害は、精神的物體的に複雑且つ深刻なトポロジカルなる障害であると言はなければならぬ。かゝる障害を如何にして突破するかは戦場に於ける環境的行動反省の上に重要性を有つてゐる。而して之こそは、戦場體驗者の、自覺的にしろ無自覺的にしろ、必ず幾度か有たざるを得ないと共に、更に之を越えざるを得ない領域である。

二、突撃精神

生死の際に於ける日本軍人の行動は、一に突撃乃至白兵戦に依つて遂行せられる。突撃に於て最も重要なものは言ふ迄もなく強固なる突撃感情精神である。友軍の環境から、敵軍の環境へ、而して此の兩者の中間に生死の際の領域が介在してゐる。突撃に依つて吾々は上圖の中



太い線を以つて劃されたる如き突入の領域を構成し、最後に白兵戦を實施するに至るのである。此の場合上圖のものは指揮官を示し、他のものは兵を指してゐる。然るに此の突撃感情精神は二つの面を有つてゐる。一は、内的突撃感情であり、二は、環境的突撃感情である。此の兩者は同じものではない。内的突撃感情が中樞にあつても、環境に應じて其の感情が發揮せられることがなければ中樞的感情の活動はないのである。眞に働く突撃感情精神は、夫々の環境に應じて何時でも働き得る力を内に有つてゐなければならぬ。即ち環境に即應し得る周邊的なる感情を有つてゐなければならぬ。即ち内的突撃感情が單に知的反省に結び付いてゐるのみでは、未だ突撃感情精神力を構成す

るに至らないのである。而して環境的突撃感情が、身體的突撃行動と結び付くとき、始めて眞實の突撃となる。詰り、內的突撃感情が環境的突撃感情と結び付いて、或は前者が後者を通して、身體的突撃に結び付くとき、突撃感情精神は、眞實の突撃を遂行するのである。而して此の突撃に就いて最も注意すべきことは、夫が常に單に個々の行動でなくして、軍隊の組織的團體的行動として、成就せられることである。此の場合は、一に上官と部下との一體的なる行動であることは言ふ迄もない。而して、此の犠牲的行動精神の中に、我が國體の意識が、突撃感情精神の背後に差し迫つた感情として内在してゐることは、著しい特質であると言はねばならぬ。之を象徴的に言へば、日の丸の旗が、かゝる突撃感情を指揮し、又軍旗の尊嚴性が之を支持してゐるのである。

平常時に於ける傑物の修養の場所は、之を右に述べた突撃の結構に準らへて言へば、環境的突撃感情に關聯するものが主となつてゐるのである。例へば禪僧の苦しい修行の道程等に於ては、かくの如き環境を作りつゝ、其の作り行く精神力に依つて作られて行くのである。之に對して戰場に於ける環境的突撃感情にあつては、かゝる環境は客觀的強制的に來るものである

から、即ち作られたるものである限り、之を更に內的突撃感情に依つて作るものに替へなければならぬ。夫故に、何れにしても、作るところの精神力が重要であり、突撃感情精神其ものが支配力を有たなければならぬことは言ふ迄もない。かゝる精神力の有無、強弱等こそ人間的修養の基底をなすものであらう。戰場體驗の反省に於て、かくの如き精神力の差異は、農村青年・都會青年に依り、又年齢の差異に基づいて、顯著に示される。都會の青年は身體的鍛鍊が足りないと言ふ許りでなく、一般にかゝる精神力の養成に缺けてゐるものがあるのではないか。又中年・壯年に進むに従つて、僅か二三年の年齢の差異ですら、かゝる精神の自覺乃至は其の無意識的自覺の程度を著しく増すと言ふ事實が存する。而して將校のかくの如き精神力の大小の問題が、戰鬥指導上最も重要であるのみならず、軍隊の秩序の維持其のものにも、肝要なるものであることは言ふ迄もないであらう。

教育は、實に、作るものが作られて行く道程を、より多く、有たねばならない。夫は平常時に傑物の出來上る場合の自己修養に於けるが如く、師匠と弟子、教師と生徒との二重關係其のものに於ても、同様に考へられねばならないところである。教師の側に於て作るものが作ら

れて行くと同時に、生徒の側に於て作られたものから作るものへの面を加へて行かねばならない。教育は實に、作るものが作られて行くと同時に作られ乍ら作り行くものであらねばならない。戰場體驗に於ける、上官と部下との教育的行動環境は、生死の際を其の中樞として、何處迄も死の面に接し乍ら生に徹底するところの、眞實の教育即戰爭準備即生其のものゝ場所であると言はねばならないであらう。

第六 戦傷の體驗

一、血 と 土

戰場に於ける生死の一线に直面したる時こそは、若し「強い力」と言ふ言葉が眞實に生きてゐるならば、かゝる體驗時の表現に最も相應しいものであらう。其處にはあらゆる慾念が消失してゐるかの如くである。先づ食慾がない。況して名譽心等が起る餘地がない。家族に對する懷想等もさら／＼出て來ない。唯一線をにらむ凝々たる眼と對敵行動を取つた身體の動きとが感ぜられる。上下に通する一聯の組織を有つた一隊が、恰も一つの身體の如くに團體的に行

動をする。右手の痛みを左手が本能的に握つて止血するが如くに、隊長の指揮に従ふ部下の兵が右と左との手が協力するが如くに動くのである。戦鬪の間に戦友が倒れ傷付くとき自己の手を捲ぎ取られる如くに感ずる。然も部隊は部隊としてあらん限りの努力をして戦ふ動作を續けて止まない。かゝる生死の一线に直面する瞬間前迄は、重みのかゝつた鐵兜が、此のとき恰も綿帽子を被つてゐるとも感じない程、心理的に零の重さとなり、夫が全く身體の延長になつて終ふ。かくて軍刀の先端迄が、隊長の命令を最もよく代辯してゐるのである。各兵何れも全身これ眼でないものはない。次ぎに不思議にも最も重大なる決意を必要とするところの、生への執着がない。従つて死への恐怖がなくなる。夫でゐて危険は常に避けられねばならぬ。彈丸に強ひてあたりに行くのではないが、不用意に敵彈を受けると言ふことは萬全の注意を拂つて避けられる。卑怯と言ふのではない。腕力が足りないのではない。膽力を失つてゐるのではない。況して此の瞬間、國民の歡呼の聲や萬歳の響が胸に舞ひ戻り湧き返つて來るのではない。併し、此の個々の人間の集團が、大なり小なり、夫こそ思索の網のふるひにかけたと否とに拘らず、其の儘強い國民的自覺、民族的意識の強烈なる感情を藏してゐるのである。母國への自覺が、身體に

はびこつてゐる。區々たる思想ではなく、第一線に於て直ちに環境と結合してゐるところの、國是の實現への協力のみがあるのである。

戰場に於ける第一線の越え難い領域は突入したが、最後、生への一切は擲つて一丸とせられ、大地にびつたりと沿ふて動かされる。かゝる生死の際に於て、始めて國民的自覺が一如してゐるのである。かゝる場合、吾々の如何なる活動をも、極めて冷徹なる眼を以つて、時に微笑さへも加へたるが如き悠然たる態度を以つて、凝視してゐるのは、戰場となれるところの大地其のものでなければならぬ。身體的生命即精神的生命の中に流れる血の匂ひに、吾々の勇氣は、何等の督促なしに全身にみなぎり全精神を捉らへる。此處には單なる血液ではなくして、民族の犠牲的血潮が流れてゐるのである。大地に對してのみ吾々は、かゝる犠牲的血潮が、いと安らかに滲み込まれたる歡喜をまぎ／＼と體驗することが出来る。血が土に歸して行くのである。歴史的身體の血が大地の一部に根跡鮮やかに識されて行くのである。之と同時に、此の血が最早や個人的身體を養ふ血ではない。歴史的體の中に育くまれた血であり、國民的自覺を有ち、民族的發展の精神的な且つ必然的な噴出でなければならぬと言ふ意味を充實して來るのであ

る。國土に於て生長せしめられたる血潮が、此處に其の力を生むのである。異國の土地である限り我が國土と離れて存在する。然も此の大地に我が民族の血潮を流すところに、此の大地から異なつたものが生れることを要求して止まない。之は、足下の大地に於て、生長せしめられた民族に對して大なる力を與へるのみならず、此の犠牲的血潮が、母國の銃後に更に新しい血潮を育て、行く要素となりつゝある。かくて、土から血に働いたものが、異國の土に血を流して行くことに依つて、更に新しい土から血に働くことが、二重面的に起らねばならない。戦争の中に燃え上る愛は、正にかくの如き基底の上に立つものでなければならぬ。¹⁰

以上述べたことは、敵國に於ても、同様に考へられねばならないであらう。然も、同じ犠牲的血潮が、自から異なつた働きをする。夫が何處迄も血と血との戦である限りに於て、最も激越なる又慘憺たる事實であり乍ら、遂に兩者が結び合はねばならないものが、其の戦の間に徐徐に生み出されるのでなければならぬ。かゝる犠牲的血潮を生み出さしめると同時に、之を滲み込ませてゐる大なる場面、即ち大地其のものが媒介する力を有つてゐるからである。

二、負傷の體驗

伏せて右手を挙げ乍ら右後方の分隊長に敵情に就いて指示し一瞬前に自分の前に伏せてゐた兵が敵弾を受けたので、之を近付けて止血し、其の兵を後退させたのを案じてゐるところへ、ドカンと強烈なる衝撃を受けた。「やられた」と言ふ言葉を發すまいと常に心掛けてゐたにも拘らず、矢張り其の言葉を發して終つたのは残念であつた。但し、此の言葉は卑怯と言ふのではなく、單に敵弾を受けたことの自認であり、残念であることの表明に過ぎぬ。其の瞬間、視力を失ひ暗黒の世界に投げ入れられ、四肢は全く身體組織を取りはずされたかの如くになつて——恰も、猫の首をつまみ上げたときに猫が四肢を全く無力にして成行に委かすと言ふ如く哀れな形になる如き恰好になつたらうか——地上にほり出されたが、其の時左上膊部と左下腹部とに痛棒を喰はされた感じがあつた。次ぎの瞬間、暗黒の世界の現前に、暁の明星の如く一點から白光を放つて、私の意識は其處からフェードアウトされて來た。其の瞬間、「自分は生きてゐる。生命があるではないか。如何あつても生きねばならぬ。此の生命を愛惜することが自分の義務であ

る。」と言ふ猛烈な生への意念が湧き出て來た。——こんな生への意志を未だ嘗つて考へたことはない。——其のとき、直ちに上衣の左裏の物入れから繻帶包をさぐり出して、齒と右手とで引き裂いて三角布を出し、其のとき迄負傷したと思つてゐた左上膊の上部を力まかせに縛り續けてゐた。血は左腕と前腹部に散らばつて眞紅であり、全くどくどくしい色に感じられた。——併し、實際の負傷は下腹部の擦過と左肩胛部の軟部盲管銃創であつた。——其の中に兩分隊長が走つて來たが、「何大丈夫だ」と言ひ乍ら、斜右の凹地の方へ位置を變更する爲に約十米程も走つた。其の時にばつたり倒れて意識が遠くなり出した。其の後に、分隊長や兵にかゝへられ乍ら後退したことを半ば意識して居る。折よく他の中隊の衛生兵が居たらしく、出血がひどくて人事不省に陥つてゐたので注射を五本して呉れたらしかつたが、夫も擔架に運ばれる迄に二本のみが半分意識に残つてゐる許りであつた。眠たくなつて止めやうがない。眠つてよいか眠つたら起して呉れと言つたらしい。二人の分隊長に續けて戦闘をするやうにとも指示したらしい。分隊の全員が無事か、機關銃はよいかと聞いたらしい。之等のことは部下の負傷兵が後に病院に入つて來たので、其の當時の模様を聞いたのである。少し如何かしてゐると感じられる

が、全くありのままである。其の日の戦闘は午前四時から開始せられたが、負傷したのは九時
過で、假纏帶所へ来たのは十二時頃であつたらうか。かの負傷の瞬間に於て、強い生への意志
Wille zum Leben が燃えて来たことは實に不思議な位である。絶えず死を考へ、死を思ひ、
死を覺悟して来たのが、平常の私の生活であり、又思想でもあつた。正月元旦には幾度か遺言状
を書きつけて来た経験を有つてゐる。私の思想の根本に、死の哲學があり、死に就いて語るこ
とは、同時に最も深い生に就いて語ることがあつた。¹¹而して應召の爲の出發に際して、矢張り死
に就いて思ひ、死に就いて語り、死を覺悟して来たのである。葉隠に示されてゐる「二ツ一ツの場
合に早く死ぬかたに片付くばかりなり」と言ふ一語に就いても十分其の妙意を反省してゐたし、
「義利を重んじ」、「死節を全うする」¹⁴と言ふ山鹿素行の武道論をも味つてゐた。死の一步前を悠
然と歩くと言ふ心持も解り、一瞬々々が死を踏むものであると言ふ生の意義を捉へてゐた。¹⁵に
も拘はらず、生への意志が其の瞬間を轉廻して猛然と浮んで来た。Sein zum Tode であつた
ものが Wille zum Leben に翻らされた。生死の際を廻つて、生への意義を一步進めたかに思
はれた。ウウウ……と言つて、俺が死んだら、無無無……と言つてゐたのだと思つて呉れと、

第一分隊長に語つてゐたのに——此の分隊長は私の負傷後二箇月後に戦死した——今は却つて
有有……となつて終つたのである。負傷後野戦病院に容れられてから、全く身體の自由がき
かなくなつて、左腕及び左手が全部しびれ、夜全く眠れなくなつた。總べての移動に擔送せら
れて、看護兵の手にかゝらねば動くことも出来なくなつたとき、殆んど何の慾望も喪失して終
つた如くであつたのに、此の生への意志だけが益々強固になつて行くことを如何しようにもな
かつたのである。

三、負傷の自覺

激烈なる戦闘間に於て負傷し、無力の如くなり、何度も無意識状態に陥つたことを思ひ出す
と、人事不省の間は全然何も知らないのであるから、人事不省に陥る瞬間と人事不省から
意識の回復する瞬間とが、明かに意識せられて、此の両者が繋つてゐる。此の兩極の間に人格
的連続があるのが不思議な位である。此のときの生々しい経験に即して言へば、周囲の人々の言
葉や戦闘の喧騒が消え失せて行くにつれて、恰も眠りに入るが如くに人事不省に陥つてゐるの

であるが、注射を受けて意識を取り戻した瞬間に、再び周囲の人々の聲や戦闘の喧騒が聞えて来て、生への歸還を覚えるのである。眠りは死への状態であり、生への状態に於て話聲が耳に入る。生命の世界は話の世界である。獨語と雖も矢張りかゝる意味に於ける生の話の世界にある。純一に獨の世界に入つた時に吾々は死する。生死の際を反省して行くとき、かゝる意味が今考へられ得るのである。負傷の直後から引續き名状し難い苦しみを體驗する。死への突入は此處では却つて安樂である。獨の世界は、全くの安定であり、大地に歸一することである。生への意志は、強靱なる戦の眞中に置かれざるを得ない。自己と戦ひ、傷と戦ひ、而して身體と戦ふのである。生命あるものとの交りに於ても、此の意味に於ける戦は喪失し得べくもない。話合の世界こそ生の根本的徴表であり、生はかゝる話合の世界に於ける戦の姿である。戦争も亦其の様相の一に過ぎないと言へる。

生死の一線に突入することが、國民的國體的自覺心と結合してゐた如く、戦傷の體驗も亦國民的自覺心と結合してゐる。戦傷の苦痛其のものを訴へることはあり得ることではなければならぬが、此の苦痛の體驗其のものに對して僅少の不服も不平も起らないのは不思議である。自

己の生命をも奪ふべき負傷が——手早く言へば死にそこなひであり人々は命拾ひをしたと言ふが——何等の不平心を起させないで、恐らくは不思議な程感謝の念が湧いて来る。幾人かの看護兵に感謝し、軍醫に感謝の念を覚える。總べての事が國家の力であり、國の恩を離れてかくあるべきでないことが念頭に浮ぶのである。強い敵愾心を以つて戦闘を續けて來たことが遠い昔の如くに思はれ、敵をさへ憎むことが出來なくなつて終ふ。劍に依つて自己を磨くと言つた山岡鐵舟の如き心境を思ひ併はさせるのである。¹⁶揚子江を病院船に依つて下流へ航行するとき敵から其の船へ砲撃を受けても、憐憫の情こそ起れ、夫が憎しみの情と化して來ないのである。敵を愛すると言へば言ひ過ぎるかも知れないが、矢張り此の心境の中に、今次の聖戦への不思議な参加の眞意味があるのであらう。

負傷に依つて自己を磨くと言ふことの他に、病院生活の諸相を通じて種々の經驗を深めることも出来る。戦死者の遺族に取つては、言ひ難い淋しさではあるが、併し、即死に依つて戦死者となつた勇士は安樂でもある。夫故に、戦傷に依り、戦闘の苦痛と戦傷の苦痛との兩體驗を併せ有ち得たものこそ、寧ろ戦争體驗の上より見れば凱旋の勇士よりも一面に於てより深いもの

があり得ると言はねばならないであらう。戦死者は獨の世界に入つて終ふ。戦争に就いて語るものは、實に生き遺つた者の、生の世界に於てである。而して、戦傷者に對する世人の待遇・態度・奉仕等の各種の事業施設等を通じて、戦時に於ける銃後の社會相を最もよく捕へる機會が與へられてゐることも亦、戦傷者として生き遺れるものゝ知り得る世界でなければならぬ。

第七 表現の世界と教育

一、話合の世界

生命の世界は話合の世界である。戦傷の體驗に基づいて生死の際の反省をなすとき、生命の世界に於ける話合の重要意義を見出し得ることは既に述べた。ハイデツガーは話に就いて「話合は世界内存在の理會性の意味ある一員である。」¹⁷と言つてゐるが、言語はかゝる意味に於ける話の語り出されたものであり、意味とはかゝる話の分節されたものであり、解釋や陳述には、既に其の基礎にかゝる話其のものがあるのである。而してかゝる話は、理會性の分節であり、之が客觀化の媒介を得て、表現の完成を見るのである。かくて理會は、或精神的な意義が物的な

素材に表出されることに依つて、更に理會されることが可能となるのであり、此處に表現の世界が現出する。話は實にかゝる意味に於ける表現の世界であり、同時に理會の世界であると言はねばならない。此處に廣義の理會と廣義の表現との相互的な交渉關係があるのである。¹⁸

廣義の理會は二つの性質を有つてゐる。其の一は表現の理會であり、其の二は理會に於ける表現性である。廣義の表現は又二つの性質を有つ。其の一は理會の表現であり、其の二は表現を含む理會性である。而して此の表現の理會は、理會の表現と關聯して居り、理會に於ける表現性は、表現を含む理會性に關聯を有してゐる。廣義の理會と廣義の表現との相關は、理會に於ける表現性の基底の下に、表現の理會を通して、理會の表現に至り、遂に表現を含む理會性に達するところに實現するのである。併し、時として吾々は理會に於ける表現性より、以上述べたるが如き通路を迂回することなくして直接に表現を含む理會性に達する場合を見逃してはならない。吾々は此處に直接的な内在的全動的なる、廣義の理會と廣義の表現との統一を見出すことが出来る。話の基底の上に成り立つ理會・表現の世界はかゝる構造の上に成り立つてゐると言はれ得るであらう。然も尙、かゝる場合に於ても、表現の理會と理會の表現との自律的發

動的なる相關關係が、其の中に無視されて終つてゐるのではない。廣義の表現の世界より言へば、其の自律的發動的なる面に於て、理會を表現する場所が現はれる。其の媒介をなすものは、事實及び言語であるが、廣義の表現の世界の内在的全動的なる面に於て、表現することを含む理會性が現はれる。話は即ち之である。而して此處に注意すべきことは、普通に話しすることに對して黙することも亦、話の形式であり、一種の、或は時に重要な話の一部であることである。戰場に於ける生死の際に直面したる體驗に就いて、吾々は、かゝる話の重要な事例を幾度か目撃することが出来る。而して自己自身の戦傷の體驗に於ても亦、かゝる黙と言語と事實と更に態度等に依る、眞の話の世界に立ち入るところの喜びを味ひ得たのであつた。此處に生の中に死を見、更に死の基底を有つところの生の表現に於ける、教育の基本的反省に關して、得難たい體驗を掴み得たことを、自認せざるを得ないのである。

表現の世界に於て吾々は眞實の生命に接する。生命と生命との交渉面は廣義の表現の世界に於てあらねばならない。教育は、其の本質に於て、かゝる意味の生命と生命との交渉面なくしては成り立つべくもない。如實に掴まれたるものが十分に解されるところに理會性の分節があ

り、之に對して、かく如實に解されたものが掴まれて行くところに、表現性の完成があり、此處に教へるものと教へられるものとの交渉する教育的場所が成り立つのでなければならぬ。話の教育的重要意義、話合に於ける教育の基本的反省が、常に忘るべからざるものである所以である。廣く一般的に、生の世界は表現の世界である。教育も亦かゝる基底の上に其の眞實性を保つことが出来る。

二、死の基底に立つ生の世界

戦地に於て吾々は、上官下官の區別なく、生死の一線に突入することを共通の舞臺として生きてゐる。戦地にあるものゝ表現の世界は、常に死の基底の上にある生の世界であり、話合の世界であり、更にかゝる意味に於ける表現の世界である。戦地に於ける軍隊内の種々の教育は、直ちに戦争準備であり、同時に戦争であり、更に死を含みつゝある生命の交渉面にあると言はねばならない。然も吾々は、他方銃後の國民との關係に於て、一般的な表現の世界にも生きてゐる。戦地にある者が暇を見出しては故郷に音信を怠らないのみならず、故郷よりの音信を非

常に喜ぶのは之に由るのである。殊に、肉親・近親・親友間の音信のみならず、全く偶然的な事情から通信を始めるに至つた、未知の人々の間の音信を通しての話合に依つて、限りない喜びを味ひ得るのも、戦地に於ける表現の世界が、一に死を内に含んだ生の働きに、其の一瞬一瞬を接してゐることに基づくと言へるであらう。戦地にて受けた恩師の手紙等は、私に限りない師恩を偲ばしめたのである。¹⁹殊に慰問品其のものの中に、無限なる話合の意義を捕捉することが出来る。同封されたる慰問文のみならず、其の中に收められた一々の品物自體が、音信の代辯者でないものはないのである。話合の世界は、戦傷を媒介として、更に、各地の病院に於ける白衣者の上に迄も延長せられる。慰問者と戦争患者との間に問ひつ問はれつするところの戰場體驗の話合は、如實に、以上述べ來つた如き、特殊の意味を含むものであることを明かに示してゐる。殊に、銃後の一般國民の戦争への興味、白衣の勇士への感激、野戦への關心、銃後活動への自覺、特に、現代の若い女子の之等の諸點に關する興味が如何なるものであるかと言ふことを考へるとき、現時の社會世相の一半を理會するに難くない。而してかくの如き事態に立ち至つてゐることも亦、戰場體驗が死を内に含む生の交渉其のものであることに基づく

のである。²⁰吾々が常に、かくの如き表現の世界に立つ生の力を深く省みざるを得ない所以である。而して此處にも表現の世界としての教育の本質の反省の外に、表現の世界に於ける教育の内容及び方法其のものゝ反省の必要なることを十分に示唆してゐるものゝあることを、認めなければならぬであらう。私は、戦地にあつて、常にかゝる意味で、教育を味ひ、之を實施するに努めたのであつたが、白衣の身となつても尙、同じ意味のことを一層廣く感得せざるを得ないのである。

第八 身體的實力と體育

戰場體驗及び戦傷體驗を反省して、表現の世界を考へ、之と教育の關係を、主として精神的側面を通じて考察したる私見の一端として述べた。次ぎに戰場竝に戦傷の體驗を通じて、身體的實力に就いて反省を加へ、少しく體育への示唆を述べなければならぬ。尤も、體育に就いて私は詳しい研究を爲してゐるものではないが、以下の叙説が専ら體驗より出でたるものとして取り扱はれる限り、²¹許容せられ得るであらう。

健康の要素に就いては、普通に身體の障害がなく機能の好調なることが先づ考へられる。而して身的内實の動く能力の充實してゐることがなければならぬ。かくの如き活動能力は言ふ迄もなく身體の諸機能の好調なることに基づいてゐる。かくして一定の身的運動の結果一定の休息に依り疲勞の快復の平調なることは、健康要素として重要なものと言はねばならないであらう。身體の障害のないことは健康の基本であり、身體的内實の活動は健康の實質であり、休息に依る疲勞の恢復は、健康の様相を示すものと言はれ得るであらう。

一、環境と身體

健康に就いて一應以上の如く考へたる後、更に健康條件を考へると、環境と身體とを擧げねばならないことは言ふ迄もないが、此の外に尙時間を考慮に加へなければならぬ。健康條件としての環境は之を種々の方面から多角的に考察することが必要である。先づ、衣・食・住の三者である。併し、言ふ迄もなく、衣に就いては、厚着・薄着等の外、衣服の種類・質等を考へることが必要であり、食に就いては、主食・副食の外、水等を考へねばならない。殊に戰場に於て

は、水が重要なものとなる。住に就いては、日光・家屋の廣狹・溫度等に就いて考へるべきであらう。衣・食・住の外に、尙健康條件としては、地質・地形・地勢・高度等の土地の情況を考慮に入れねばならぬ。従つて季節・氣溫の變化等氣候乃至風土に就いても考へなければならぬであらう。而して此の土地・氣候乃至風土は、健康條件として自然的地理的環境と言ふべきものであるが、此の外に健康條件としての社會的環境を加へねばならない。郷土の風習、地方の社會意識のみならず、社會世相一般の動向に依つて、健康其のものを左右させる條件が幾多存することは、見逃すべからざるものである。或時代にあつて墮弱な氣風の支配してゐるときと、事變の進行中の銃後の時代の如く、活潑にして國民の緊張してゐるときとに於て、健康條件の異なることは、後に述べるが如き、個人的なる心意の態度と、深い關係を有して居ることは言ふ迄もない。即ち、健康條件の環境的側面より見れば、衣・食・住は基礎的環境であるが、土地・氣候乃至風土は地理的環境であり、社會的環境は觀念的環境であると言ひ得るであらう。

次ぎに健康條件として、身體が重要なものであることは言ふ迄もない。之には第一に體質が考へられる。此の體質は先天的なる條件に結び付くものと言はねばならない。第二に營養が

考へられる。之は後天的なる條件に結び付く。此の營養に就いては其の基準的程度を考へねばならないと同時に、營養の個人的差異を常に注意すべきであらう。嗜好品と營養との關係の如きものもかくの如き方面から考へられることが出来ねばならぬ。戰場に於て嗜好物を得難たいとき等、特にかゝる個人的營養の差異性に就いて考察を加へられるべきものが多々ある。第三に、健康條件として身體を考へるとき、體質と營養との外に尙忘れてはならないものは心意である。身體を考へて心意を加へることは、一應不當の様ではあるが、既に述べた如く、健康條件としての環境に於て、觀念的環境を考へねばならなかつたと同じ様に、身體に就いては常に精神的なる方面を忘れてはならない。心意は身體の鍛錬中樞である。元來かゝる心意を離れて身體の健康條件を考へることはあり得べからざるものである。生理學的なる身體は、健康條件に環境を加へたるときに考へられるべき心意的身體と異なり、單に物質的なるものである。健康條件に其の社會的環境を考へると言ふときには、必ず身體に心意を加へて其の環境を考へねばならないのである。身體を環境的に考へることには、身體を心意と離れて考へることが許されないのである。

二、健康條件としての時間

環境と身體との外に、此の兩者の動的結合としての時間を健康條件に加へなければならぬ。吾々は、先づ健康要素に關し其の様相として疲勞と休息とを考へたのであるが、健康條件としての時間に於て更めて、休息と快復とを考へねばならない。かゝる意味の時間は疲勞に關係し、又睡眠と離るべからざる關係を有つてゐる。而して時間的なる側面から、健康の變化と現實とを捕へねばならない。之は、運動・勞役・激動・感激等と密接なる關聯に置かれてゐる。かくの如き意味に於て考へられるべき時間は、環境的身體の體驗時でなければならぬ。夫故に、環境的身體の體驗時に於て、環境と身體との二つの健康條件が結び付けられてゐるのである。體驗時の上に見らるべき健康條件こそ健康の活動の様相を明かにするものであらう。夫のみならず、かゝる健康の時間的條件を考へることに依つてのみ、健康條件の他の二面を眞に捕へることが出来るのでなければならぬのである。體驗時を中心として、環境の平常的なるものと身體の平常的なるものとの結び付けられたる健康を健康の平常的なるものと見ることが出来る。

るならば、之を標準として、次ぎの二つの場合を考へることが出来る。其の一には、環境的條件の異常なるものと、身體的條件の平常なるものと結び付けられる場合があり得る。其の二には、身體的條件が異常なるものと、環境的條件が平常なるものとが結び付けられる場合があり得る。前者の事例は、住み慣れた郷土を離れて異郷に旅行せる場合とか、社會的事變の爲に平常時とは全く異なつた社會的環境にある場合とかに於て、身體的條件としては平常的であると言ふ場合である。後者の事例は、病氣、極度の過勞の如きもの、外、修養會等に入つて身體的條件の異常である場合に於て、環境的條件としては平常的である場合である。尤も、何れの場合にしても相互的に全然無影響であるのではなく、此の環境と身體との條件は相互に影響し合ふべきものであるが、比較的典型的なるものを以上の如く定めることが出来るであらう。若し右に述べた二つの型が考へられるならば、次ぎには健康條件の環境も身體も、共に平常的なるものから異常なるものに變つてゐる場合を考へねばならない。而してかく環境と身體との何れもが、異常なるものとなる場合の體驗時に於て、環境的身體としての健康條件が顯著なる差異を示さざるを得ないのは勿論である。吾々はかくの如き場合の最もよき事例を、戰場並

に戦傷の體驗時に於ける健康の條件に就いて目撃し得るのである。

三、身體的實力

以上述べた如く、健康の要素と健康の條件とを考へれば、吾々の身體的實力は、凡そ如何なるものであるべきかを、多少とも明かにし得るであらう。其の主なるものを挙げれば、第一に身體的實力は、多角的なる健康條件の變化に堪へ得る實力を有たねばならない、例へば戰場に於て水質の差異があり、副食物が不十分であり、自然的環境が異なり、精神的狀況に動搖を來し、睡眠の時間が不足し且つ不規則となり、疲勞が極度に達し、全體として不規則的な異常的な生活が続けねばならない場合に、平常的な健康條件に堪へ得る力があることが、認められてゐるのみでは、かゝる條件變化に堪へ得るが如き、身體的實力があり得るとは言はれないであらう。之等の點に關しては更に説明を加へる必要もない程である。而して此の多角的なる健康條件に堪へ得るといふ一般的なる限定を行ふた上に、尙之を實際的見地から細分して、其の主要なる事項を挙げれば、一には、基本的營養の低下に抵抗し得る力、換言すれば、能ふる限り、最少

限度の營養度に堪え得る力を有たなければならない。二には、個人的なる營養の差異の變化に對する順應性を多く有たなければならないであらう。夫故に若しかゝる順應性の少ないときは、例へば相當な空腹時に於てすら、嗜好物以外のものが殆んど食へないといふ場合が起ることが屢々ある。かゝる個癖の強いものは、以上述べた如き身體的實力の上から見て、決して十分なものではなく、却つて其の弱點を暴露せざるを得ないであらう。三には、健康力に對應すべき精神的要素の重要性である。即ち、かくの如き一、二、三等の諸點を如何にも變化せしめ得て始めて、多角的條件の變化に堪える身體的實力を構成することが出来るのでなければならぬのである。

四、鍛鍊的體育

健康の要素、健康の條件及び身體的實力の標準の三者を考察したることに依り、吾々は此處に鍛鍊的なる體育の新しい着眼點を考へることが出来るであらう。其の第一に、身體的實力の養成に關して言へば、先づ一の環境に固定せる身體的存在の仕方は、眞の安定的なる身體的實

力を保有せしめるものではない。夫故に、身體的實力の増大の爲には、他の環境への出入の可能性及び其の環境變化への順應性の養成に努めなければならない。其の第二に、健康の身體的側面に關して言へば、營養度の低下並に融通性に對し出来る限りの順應力を養成しなければならない。之は換言すれば、何んでも食へ得ると言ふことである。此の點は戰場に於ける身體的實力の維持及び確保の上に、非常に大なる力を有つてゐると言はねばならない。而してかゝる身體的實力の養成を目的とする鍛鍊の標準として、以上述べ來つたことの半面をも併せ考へねばならない。即ち、一環境に執着したる生活力は比較的弱く、種々の環境に出入したる生活は順應力が大であり、又個別的偏執を出来るだけ少くすることは身體を種々の生活形式に慣れしめることとなるのである。かの都會人と地方人との兩方の生活を比較研究するとき、前者としての生活を主としたるものに對し、後者としての生活の經驗を出来るだけ多く加へしめる必要のあることは、誰人も認めねばならないところであらう。戰場に於ても實力ある軍隊は、多く農村地方出身者に依つて構成せられてゐることは、主として以上の如き事情に基づくものと言はねばならないであらう。

最後に、身體的實力と體育とに就いて、健康狀態の環境的身體の場所としての、體驗時其のものから、翻つて其の環境や身體の意味を、多少根本的に眺めて置くことは無益ではないであらう。體驗時より言へば、健康は身體的には休息・快復の様相を有ち、環境的には變化・時空性(現實)を示す。體驗時に於ける身體は環境の一部となる。外的身體が此處に考へられる。自然に逆ふものは亡びなければならぬのは必然である。而して時間の流動が精神的活動と表裏をなすとき、内的身體が考へられるのである。以上は身體に關聯して述べたのであるが、同じ事實を環境と時間との關聯を主として見れば、環境は時間の外廓であり、此處に外的時間が見られる。之に對し、時間は環境の擔持者となるのであり、此處に内的時間が考へられるのでなければならぬ。體驗時即ち環境的身體の時間は、運命的なる時間であり、健康條件としての時間と環境とは、身體其のものゝ擔持者であると言はれ得るであらう。かく見て來ると、吾々の此處に述べ來つたこと、即ち身體的實力と體育の新着眼點は、體育の基本的場面としての體驗時間を重要視すべきことに歸着する。環境的身體的實力の養成の必要なることを明かにすることは、かゝる意味の體驗時間を究明することに盡きると言ひ得るであらう。

第九 建設的展望

以上簡單乍ら、戰場に於ける生死の問題を中心として教育の基本的反省に及んだのであるが、尙最後に今次の事變の建設的展望の要綱を附言せねばならぬ。

第一に、戦争と國民との關係に於て吾々は著しく公民的自覺を高めつゝある。國民と國防、國民と外交、外交と國防、之等の點に就いての知識と情意とが深化せられてゐる。銃後の活動殊に其の組織的行動の發達は、今後とも益々維持確保せしめられねばならない。

第二に、戦争参加者に就いて、吾々は、第一線部隊と銃後國民との二大區分をなすべきことを主張する。而して第一線部隊には、戰鬥部隊・警備部隊・守備部隊・補充部隊等を考へ得るが、銃後國民には一は爲政者他は國民一般が考ふべきである。在郷軍人の如きは、第一線部隊と銃後國民との結合點にあるものと言はれ得る。此の兩區分の組織こそ今後一層發達せしめなければならぬ事業であると言はねばならないであらう。銃後の中央爲政者の側に於ては總べての事が中樞的に考へられる。其の點に於て全體的觀察に立ち、其の意味で積極的なるものを有

つてゐる。企畫的計畫的である。併し、之等の實現は、第一線部隊の實施に俟たねばならない。然るに第一線部隊に於ては、其の實施が常に局部的であることを逃れ得ぬ。其の活動は積極的ではあるが、常態として計畫的であるよりも寧ろ應急的であることを逃れ得ない。然るに、此處に最も重視すべきことは、中樞的計畫と第一線の實施との中間を連繫する通路に於て、絶えず種々の變容が行はれることである。内容的にも時間的にも、かゝる中間的變容が行はれることは、中樞的計畫に齟齬を來たさしめるのみならず、第一線の實施にも効果を失はしめる場合が多々あり得る。將來に於ては、此の中央部と第一線との中間的變容の相互的關係を一層能率的に整序することが必要であらう。

建設的展望に關して、吾々は破壊・維持・建設の三段階を分つて考へなければならぬ。第一に、破壊的なる戰爭に就いては、戰爭其のものゝ中に教化・經濟・國交・國防等の諸點を忘れてはならないのである。第二に、維持的なる事業に就いては、文化的工作が重要度を増して來る。防共帶政策は勿論完成せらるべきであるが、第三國殊に英佛等に對する資本對策が考へられねばならぬ。其の爲には内外地に於ける兵備の配分が考へられねばならないし、内地資本の對外進出の

活動組織も達成せられねばならない。之が爲には、更に人材及び財力の配置が何より考へられねばならないところである。之等の事業に關聯して、第三に、支那人氣質、支那の社會相の理會に努めねばならぬ。之は國民教育乃至社會教育の重要な任務である。支那の財力・資力は豊富であり、支那の人口は多大である。支那人の素質は高い。併し、支那の現狀其のものは、之等の何れの點から見ても、決して高度文明化してゐるとは言ひ難い。吾々は、今後單純な無理會な支那人觀を止めねばならない。此處に第四に、日本人の自覺心の必要なることを強調せねばならぬ。日本人は、世界人に對して更に強い自信力を養はねばならない。之は、單なる高慢心と區別すべきものであり、絶えず之と區別し、凡そかゝる墮落に陥ち込むことを警戒しなければならぬものである。而して日本人の有つ本來の勤勉なる精神を持續せしめてこそ、維持的的文化工作を成就せしめることが出来るであらう。

維持的的文化工作の成功に依つて、吾々は進んで、建設的的文化工作に入ることが許される。此處に於ては、破壊乃至維持の時代と反對に文化工作が主流となつて來る。第一に、支那文化の理會を一層深くしなければならぬ。殊に高度支那の理會が必要である。夫が爲には、支那在

住者の教養の高度化を圖ることが先決條件でなければならぬであらう。第二に、日本文化の創造が必要である。之が爲には偏狹なる西洋文化の排斥ではなく、西洋文化の長を益々採り乍ら、西洋文化を超越すると言ふ努力が必要である。而して支那文化をも克く之を咀嚼し、更に現今の支那をも十分に容れて、之をも併せ支配し動し得るだけの底力を養ふが如くに努めねばならぬ。かくて第三に、教育的活動に反省を加へて行かねばならないのは言ふ迄もない。其の一は、對支那人教育である。支那人に對して、日本の理會を深めしめる方策が確立せられねばならない。其の二は、對日本人教育である。之は小學校兒童の教育に於ても、師範學校生徒の教育に於ても、將來、既に述べ來つた如き意味に於て、支那の理會を一層深からしめる、あらゆる方策が、考慮に加へられねばならないのは言ふ迄もない。又對外的に活動する教師の養成の外、文化人の一般的な對支積極的關心を高からしめねばならない。最後に、實力を以つてかゝる文化的工作の裏付けを爲すものとして、日本軍隊の眞實力の向上が重要である。軍隊の實力は單に戰鬥力のみならず、更にかゝる戰鬥力と同時に、文化的戰士たるべき實力の向上を圖らねばならない。宣撫隊との聯絡の緊密性を維持することは其の作用の一つの現はれであらう。

更に戰鬥實力と戰鬥人の文化的實力の向上は、軍隊に於て特に將校の夫が、一層向上せしめられねばならないものがあることは言ふ迄もない。²²

註記

- 1 此の拙稿は、昭和十四年三月三日に出來、教育學研究、同年五―六月號に掲載したるものであるが、本書の續編として加へるに際して、内容上特に加筆することを止めた。唯、各節を更に細分し、又必要に應じ、此處に註記を附することとした。
- 2 具體的な事實の報告は、以下の教育哲學的考察に關聯せしめた許りでも、之を幾何でも容易に爲すことが出来る。併し、此處には之等に就いては、全部割愛し、唯、原理的に考察してゐるのみである。
- 3 本書、第一編第四章に於て、軍人精神に言及せる箇處、三六頁參照。尙、教育學上に於ける生活準備説に關しては、篠原博士、批判的教育學の問題、四九頁以下參照。
- 4 マタイ傳、第七章、三四節。
- 5 戰傷後、乙竹岩造博士より戴いた私信の一節。
- 6 負傷の療養中、篠原助市博士より戴いた私信の一節。
- 7 内地を出發する少し前、篠原博士より戴いた私信の一節。
- 8 原久一郎氏譯、日本評論社版、第一卷、三二〇―三二二頁參照。
- 9 拙稿、教育のトポスの形態、教育學研究、昭和十四年、十一月十一日號參照。
- 10 八紘一字の精神に基づく皇軍

戦争理論は、戦の要素に愛の要素を包含したものであると言はれてゐる。従来、教育學では教育愛を中心にして考察したが、師弟の眞實の結合には争 *Kampf* 即ち戦の要素が、加はらねばならない。尙、本書、第一編第一章、五頁参照。11 吾々は、死の問題を教育の基底として考へねばならぬ。本書、第二編第七章七〇—七四頁に於ては、死への人間的態度に就いて、哲學的人間學の立場から、之を多少考察し、之を結論的に述べてゐる。尙、教育學上、死を中心問題と考へて *Todeserziehung* を考察してゐるものとしては、次ぎの如きものがある。W. Koepf: *Die Erziehung unter dem Evangelium*. 1932. S. 68 ff. 12 本書、第一編第一章、一頁参照。13 本書、第二編第六章、五九—六〇頁参照。14 本書、第二編第六章、五二頁参照。15 本書、第二編第七章、七二頁参照。尙、Heidegger: *Sein und Zeit*. 1. Ste. Aufl. 1931. S. 233—267. 16 本書、第三編第十五章、一七〇頁参照。17 Heidegger: a. a. O. S. 161, S. 163—164. 18 拙稿、話合の意義、同志同行所載、昭和九年、参照。19 ××の奥地に在つて、小西重直博士から戴いた一枚の葉書は、彼地に上陸後三週間餘りに、最初の音信として入手したもので、其の葉書より約一箇月も遅れて届いた慰問品と共に、何れも實にありがたかつたので、其の當時の深い印象が忘れられないものである。20 歸還してから自己の生命の存続に就いて時々反省せしめられる毎に、銃後の人々への感謝の念が新たになつて來る

のを感じる。21 此の一節は、トボロジカルに行動的環境に於ける體育を考へた私見に過ぎないが、固、彼地に在つて三日熱マラリヤに苦しめられつゝあつた際、纏めて置いたものに基づいてゐる。22 私の家は代々神職であり、今も引續き叔父が父に代つて其の職を勤めてゐて呉れる。父は其の生涯を教育に盡して現職の儘に倒れた。現在、私は天恩の限りないありがたさを負傷の跡に却つて體認しつゝ、其の機能の障碍を少しづつ克服し乍ら、日々新たに勇を鼓して教育行政の實務と教育の研鑽とに従事することに依つて、再起御奉公の一日々々を送り得ることを感謝してゐる。父が亡くなつたとき、私は次ぎの如き拙ない一首を詠んだ。

空蟬の人の世なれば親も子も

死にも生きにも大君が隨意に

私は、此處に、此の歴戦の反省録が、父に依つて讀まれることの出来ない淋しさを味ひ切れないが、今此の歌の心を新たにして、大君の鴻恩に深く感激しつゝあることを述べ、併せて護國の英靈に深甚なる敬虔の念を捧げ、更に出征將兵の武運の長久を祈念せざるを得ない。

昭和十五年四月十六日印刷
昭和十五年四月二十日發行

定價金壹圓五拾錢



著作者

羽田隆雄

發行者

東京市神田區錦町三丁目十一番地
山本慶治

印刷者

東京市牛込區山吹町三丁目一九八番地
山本禎男

印刷所

東京市牛込區山吹町三丁目一九八番地
株式會社 宗文社印刷所

發行所

東京市神田區
錦町三丁目

培風館

振替東京三二六一七
電話神田三七七四

付奥道師と道士武

大泉師範校長

木下一雄著

武教主義教育

全一册 菊判
定價 二・二〇
送料 二一

黒澤尻中學校長

前野喜代治著

益軒とその教育思想

全一册 四六判
定價 一・二〇
送料 二〇

堀岡文吉著

國體起源の神話學的研究

全一册 菊判
定價 四・五〇
送料 三三

東京高校教授

近藤兵庫著

國民道德の倫理學

全一册 菊判
定價 三・〇〇
送料 二一

大泉師範校長

木下一雄著

日本道德學

全一册 四六判
定價 一・三〇
送料 一〇

東京市神田區錦町三日

培風館

振替東京 三二六七一

253
855

終

